

「共同運搬人」

マタイによる福音書 11章 25節～30節

説 教 軽込 昇牧師

「すべて重荷を負って苦勞している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」(マタイ福音書 11 : 28)。主イエス・キリストは、このお言葉をもってわたしたちをご自分の恵みへと招いてくださいます。

しかし、私たちはイエス・キリストの光によって自分の汚れが明らかにされることを拒み、イエスのお言葉にも素直に従わない厄介な存在です。こどもがあれを買って欲しいと泣き喚くように、なりふりかまわず神に訴えることもできない。まっすぐに神に向かわないで、内側へ内側へとねじ曲がっていく、それがわたしたちです。

主イエス・キリストはわたしたちの救い主であり、人間になられた神ご自身です。主イエス・キリストはまことの神が人間となられ、地上の人生を生き、死んで、復活されました。そのお方であるからこそ、「すべて重荷を負って苦勞している者はわたしのもとにきなさい」というお言葉を語ることができ、わたしたちはそのお言葉を真直ぐに受け取ることができるのです。わたしたちの不信仰より、わたしたちを信じてくださるキリストのお力の方が強いのです。

今日の聖書箇所は、主イエスを救い主として受け入れ、信じて従っていくか、それとも主イエスを十字架につけてしまうかの分岐点になる、わたしたちの決断を促す大切なお言葉です。

第一 「わたしのもとにきなさい」。主の恵みを浅はかに押し量ってはなりません。あなたがたの行くべき人は他の誰でもない、主イエスのもとです。

第二 「わたしのもとにあなたの重荷を降ろしなさい」。「重荷」は罪と結びついています(ヘブル書 12 : 1)。わたしたちが、神さま抜きで抱え込んでいる怒り、恨み、ねたみなどの重荷は降ろしたくとも降ろせません。しかし、主イエスはそれを私の足もとに置いて行けとおっしゃいます。あなたにはそうすることが許されている。重荷を降ろしなさい、休ませてあげよう。そこに私たちの希望があります。

第三 「あなたがたを休ませてあげよう」。砂漠の旅人がオアシスで休むように、真実の休みは新しい新鮮な命が与えられ、また旅を続ける

ことです。与えられた課題を担っていく力を与えられる、祈りこそ、真実の休みです。

第四 「わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい」。わたしたちは主イエスの祈りの姿勢に学びたい。主イエスは、神さまへの語りかけ、神への祈りをそのままわたしたちへの語りかけとなさっておられます。神に向かって目を上げ、お父さんと祈っておられるその祈り(25節～27節)のまなざしをそのまま、周りにいる人々に向けて、28節から「あなたがた」と呼びかけておられます。主イエスは、「重荷を降ろして休むというのは、父なる神に向き合うことだ、あなたの重荷は神に向き合わないということ。あなたのなすべきはわたしと一緒に神をほめたたえること、わたしの賛美に声を合わせなさい」と言われます。

わたしたちの抱える不安、重荷、それらすべては神に真直ぐ向き合っていないことから来ます。ふてくされているわたしたちに、主イエスは「わたしと同じようにしてごらん」と手本を示されます。聖書には記されていませんが、30節の後でもう一度、主イエスは神にまなざしを向けておられるのではないのでしょうか。主イエスは、神に祈っているそのまなざしでわたしたちをご覧くださり、そして再びそのまなざしを神に向けられる、このお姿をこそわたしたちは真似るべきであり、学ぶべきことです。

第五 「わたしのくびきを負いなさい」。カーペンター(大工)というよりクラフトマン(指物職人)であった主イエスは、私たち一人ひとりの身体、肩にあわせてくびきを作ってください。わたしたちは重荷を主イエスの元に置いて、「わたしのくびき」として与えられたものを担うのです。くびきは決して重荷ではありません。担うべき課題をわたしたちのくびきとして受け取るのです。くびきには二つの輪があります。その一つの輪にわたしたちの首が結び付けられます。もう一つの輪に主イエスが首を差し入れてくださるのです。もしキリストと一緒に重荷を負ってくださるなら、その苦しみも耐えることができます。ただし、キリスト抜きではこれはたちまち重荷となります。あなたもキリストと一緒に、くびきを負う人生を歩んで行って下さい。

(記 説教要約奉仕者)